



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	雲南の「近代」を考え直す：世紀転換期における空間、メディアと知の交錯 [全文の要約]
Author(s)	董, 子昂
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第16323号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95256
Type	doctoral thesis
File Information	DONG_Ziang_summary.pdf



【学位論文内容の要約】

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：董 子昂

学位論文題名

雲南の「近代」を考え直す

—世紀転換期における空間、メディアと知の交錯—

課題の設定

本研究は、1900年代前後の雲南社会を対象とし、従来非常に後進的とされてきた雲南が近代へと移行する過程を描き出すものである。この過程を明らかにするにあたり、同時代の中国、日本、そして西欧との関係性に着目し、複数の力が雲南に作用した結果としての「近代雲南の誕生」を解明することを目指す。

具体的に言えば、本研究の目的は、19世紀末から20世紀初頭にかけて近代の雲南と密接に関連する三つの社会、すなわち清末期の中国、明治期の日本、そして第三共和政期のフランスに注目し、当時の新聞雑誌に掲載された記事資料を通じて、それらの記事がいかなる文脈の中で生み出されていたのかを検討することである。それにより、近代的思想と制度が雲南に導入されるルートが複線的・多重的に跡付けられ、雲南の近代性が成立する社会的・思想的経路と内部構造も浮かび上がってくる。

中心と周縁の関係に注目し、近年では雲南に関わる研究において、「周縁からの出発」という視座を比較的に早い時期に提示したのは毛里(1998)である。毛里は新疆、内モンゴル、チベット、西南中国など、中華世界の複数の周縁で働く求心力と遠心力に注目しつつ、文化的・社会的な多様性をもつ周縁が政治的に統合されたシステムの働きを論じている。「周縁から」という視角に対して、村田(1999)は「周縁は中心を刺激し活性化したあと、再び中心に回収されるのだろうか」と指摘し、「周縁からの中国」ではなく、周縁自体に沿って「周縁としての中国」を議論すべきだと述べている。

これらの議論からすれば、「周縁からの出発」という研究視角は「中華中心論」を超えることには成功したが、その一方で周縁自体を研究の主体的地位から外し、「中心」の問題を解決するための道具とする結果になりがちである。近代雲南の歴史的主体性を取り戻すために、本研究は「周縁から中心へ」ではなく、「周縁」そのものを分析の中核に置き、「雲南から出発した雲南研究」を行う。

雲南の周縁性を意識的に論じている石島(2004:3)によれば、「(近代雲南は)政治的には周縁であったがゆえに、かえって中国近代史のなかで中心的役割を果たしたことがあり、また中国に国民国家が形成されていく過程で政治的中心との関係が緊密になり、そのことによって逆に中心との緊張が高まった。経済的・文化的には雲南にも近代化の波がおしよせ、そのなかで雲南独自の近代化の努力もおこなわれた」という。

一方、フランスの漢学研究者であるピエール＝エチエンヌ・ヴィル(Pierre-Étienne Will)は、「近代」について以下のように指摘している。ヴィル(1996:102)によれば、「近代およびそれ以前の中国を研究する一歴史家であるわたしにとって、知的、社会的、経済的、政治的な選択の一定の組み合わせによって定義され得る、近代性概念の一義的モデルを作ることは不可能である」という。

本研究では、雲南の独自の近代をある種の「組み合わせ」と捉え、ヴィルが言った中国の近代性を考察するにあたって重要な位置を占めた政治と国家の本質の問題に焦点を合わせて、西欧の外部にあった雲南がもつ自分自身の文化的・社会的多様性を重視しながら、近代国家体制の膨張に対して雲南人が外部の力やマインドセットを借用・模倣し、内側に向かって均質化される内部を形づくるため複数の「戦略」から検討してきた。その中、特に国民という「想像力」が誕生した際に雲南と近代世界を繋ぐメディアの力を重要視し、動的な視点を通じて近代国民のアイデンティティの創成と、「法による」支配という政治原則の受容、および暴力を独占する近代軍事体制の成立に論考を加えている。

要するに、本研究は、従来曖昧な境界線しか持たず、「蛮夷の地」と見られた雲南ではメディアによる「同時性の体験」を通じて時間と空間意識の再編を推し進められて、結果的に国家化された空間と個人が誕生した経緯を辿り着くものである。

方法論

雲南に近代思想と近代体制の導入には、その地域に関わる複数のメディアの存在が

不可欠な要素である。19世紀後半から、フランスの雲南進出によって、雲南南部では郵政、銀行、そして鉄道など、近代的施設の整備が実現された。しかし当時の雲南人はフランス帝国が作った「植民地的近代」をそのまま受け入れたのではなく、反植民地主義を掲げ、国民国家建設に取り組み、自主的に近代を探していった。この過程のなか、雲南人の留学先として近代知の導入と近代的国民と体制の誕生に寄与したのは、明治日本であった。

本研究では、基本的にテキスト分析の方法を採用し、社会空間と知的空間の交差と重なりを考慮しながら、中国語、日本語とフランス語の史料を通じて、雲南の近代とそれを構成する諸要素を解明する。

本研究を行うにあたっては、大学や他の研究機関の図書館とデータベースを活用し、可能な限り一次資料を収集することに努めた。中国語の史料については、主に二種類のテキストを使用する。一つは伝統中国における雲南の沿革、地理、風俗、人物、事件などを記録する資料、つまり地方志である。雲南の地方志は、名古屋大学東洋史学研究室による運営されるデータベース、「雲南・東南アジアに関する漢籍史料」

(<https://toyoshi.lit.nagoya-u.ac.jp/maruha/kanseki/#gsc.tab=0>) などを通じて収集した。もう一つは雲南に関わる新聞雑誌である。当時の新聞雑誌の原文を閲覧するため、全国報刊索引晩清期刊全文数据库(1833~1911) (<http://www.cnbksc.cn/>) などを利用した。

日本語の史料については、まずテキスト間の「思想連鎖」を解明するために、雲南人による作られた中国語の雑誌で取り上げられた日本語の著作を、日本各大学の図書館と国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>) で収集した。また、明治政府の動向にも注目するため、日本国立公文書館 (<https://www.archives.go.jp/>) で所蔵されている資料も収集した。

フランス語の史料については、フランス各大学の図書館への現地訪問、フランス国立図書館 (<https://www.bnf.fr/>)、およびフランス国立科学研究センターによる開発されたデータベース Persée(<https://info.persee.fr/>)などを通じて収集した。

研究の内容

近代雲南の地域的特徴を明らかにするため、本研究の第一章では「二重の周縁」アプローチを採用した。白(2016:76)によれば、「二重の周縁」とは「西欧中心の世界史

展開で非主体化の道を強いられた東アジアという周辺の目と、東アジア内部の位階秩序に抑えられた周辺の目が同時に必要だという問題意識」である。

これまでの研究において、雲南はしばしば「西南中国」という枠組みの中で議論されてきた。しかし本章では「西南中国」に含まれる雲南と中心（北京）の位置関係を相対化し、近代世界の起源とされる西欧の「極東」という観点を取り入れ、雲南と「中心」の位置関係を再考することで、その地域の特徴を多角的に検討を加える。

より具体的には、雲南の地方志、フランス人の雲南旅行記、そして雲南人による作られた新聞雑誌などを材料として、中華による秩序の下位に位置づけられてきたと同時に、西欧による非主体化を強制されたという二つの背景のもとで、雲南に関する言説はいかに「二重の周縁性」をもたらしながら更新されたのかを検討した。

歴史的に、雲南は中華帝国の中心から遠く離れた地理的位置にあり、さらに瘴癘という特有の気候風土によって発生する熱病の存在や、「蛮夷」とされた複数の非漢民族が居住していたことから、中原の人々に「異様な目」で見られていた(張 2012)。この「異様」さは、まさに「西南中国」という枠組みにおける雲南の位置付けを象徴し、中原によるこの地域への認識を反映している。言い換えれば、雲南は中華世界の域内と見られるものの、階層秩序によって支配と被支配の関係が差別を受けながら維持されてきた。

状況の転換点となったのは、19世紀にフランスが雲南へ進出したことである。雲南はフランスの極東政策における目標の一つとされ、帝国による開発と植民の対象となった。1900年代まで、フランスの勢力が宗教的、商業的、政治的な要素を通じて雲南へと「浸透」し、新たな地域認識が形成された。具体的には、雲南の鉱山資源、動植物、そして民族がフランス帝国によって系統的に分類され、ヨーロッパ的な認識の枠組みの中で再定義されたのである。

その結果、中華世界において未開の周縁と見なされていた雲南は、フランス帝国の介入によって開発の価値が十分にある準植民地へと変貌した。これにより、雲南は単なる中華の周縁ではなく、フランス帝国の支配や開発の文脈の中で新しい役割を与えられる地域となった。

雲南植民の野望に溢れるフランス人の記録は雲南人から見れば非常に刺激的であった。まず、ベトナムに留学した雲南人は『雲南警告』という冊子を作成し、フランスによるインドシナ植民地化の状況を紹介するとともに、自身の観察と感想を掲載して

いた。この冊子では、フランスの探検家ジュール・ジェルヴェ＝クールテルモン(Jules Gervais-Courtellemont)が書いた『雲南遊記』 *Voyage au Yunnan* の紹介やベトナム亡国史の記事を通じて、フランスの植民政策に対する雲南人の警戒心を喚起した

また、同時期に日本へ留学した雲南人たちによって発行された雑誌『雲南』では、さらに激しい反仏ナショナリズムが作り出された。雑誌の編集者は、フランス語文献を翻訳し、フランスによる雲南進出の実態をリアルに読者の目の前に展示することで、雲南人の反仏感情を一層高揚させた。また、「亡国者」であるベトナム人の文章を掲載し、当事者の証言を亡国後の惨状を裏付け、同時にベトナムへの同情と亡国への恐怖を喚起した。この恐怖と警戒心を背景に、『雲南』は解決策として、中華的価値に回帰するのではなく、むしろ近代的価値を受容し、近代国家の建設を通じてフランス帝国の支配に対抗するというビジョンを提示した。

雑誌『雲南』は、雲南に関わる二つの「中心-周縁」システムを浮き彫りにし、それに対する雲南人の思考と反省の場を作り出した。第二章では、東京と昆明（雲南の省都）の地理的距離と知的ギャップを埋める役割を果たした雑誌『雲南』の印刷、流通と検閲について検討した。『雲南』は、明治日本で製作・発行されたため、北京政府やインドシナ総督府の監視を免れることができた。これにより、日本語を媒介として雲南人が当時の最先端の西洋思想に触れる窓口となり、近代的な思想形成に寄与したのである。

『雲南』の奥付によれば、創刊当初の三号は秀光社によって印刷されていたが、第四号以降は東京並木出版社、翔鸞社井上印刷工場、凸版印刷株式会社へと印刷所が変更された。このうち、東京並木出版社で働いていた印刷人であった榎本邦信は後に翔鸞社井上印刷工場の印刷人にも担当し、『雲南』の後期の印刷業務を受け継いだとみられる。その後印刷所が再び変更がされたが、最終的に『雲南』の印刷業務は凸版印刷に引き継がれた。

当時、明治政府による頒布された「新聞紙条例」に基づき、印刷者の氏名などを含む情報を政府に事前登録することが義務付けられており、印刷者には原則的に法律違反のリスクが伴った。この点からみれば、『雲南』の印刷人が検閲のリスクを冒しつつ、近代思想の中国への伝播の過程に関与していたといえよう。

『雲南』の流通は、日本から東アジア、さらには東南アジアへ広がる物流ネットワークを活用して行われた。明治日本の出版環境が『雲南』創刊の基盤を提供した一方、

その流通は発達した日本の郵便システムや汽船による日中間の海運ルートに大きく依存していた。『雲南』の郵送は日本郵便を利用して行われたとみられるが、日本郵便のネットワークが中国北部や東北部に集中していたため、雲南を含む中国南部への輸送はフランス勢力圏に依存せざるを得なかった。1900年代中国でのフランス客郵の拠点をみれば、蒙自、雲南府、海口、広州、北海は安南郵政総局(*Les bureaux indochinois en Chine*)に属し、仏領インドシナ総督の管轄に置かれていた(李 1966:57-67)。そうすると、雑誌の販売および流通は、日本とフランス領インドシナを結ぶ客郵ネットに依存しており、海路を経てフランス領インドシナ北部のハイフォンに上陸し、そこから国境を越えて雲南に到達したことが確認される。

当然、この過程は順風満帆ではなかった。外務省外交史料館で発見された新史料、「雑誌「雲南」関係雑纂」の分析を通じて、『雲南』に対する明治政府の検閲の実態が初めて明らかになった。警視庁の調査に対して雲南の編集者たちは事実を隠すなどして対応し、「反仏」という大義名分の下、雲南知識人たちは自らの革命党としての身分を巧みに隠しつつ、雑誌の継続出版を確保することに成功した。

第三章は、雲南人が明治日本を通じてどのように「近代」を思考し、理解したか、という点に集中して検討した。この問題を説明するため、本章は雑誌『雲南』に掲載された文を対象に、雲南知識人が考えた政治と国家のあり方に焦点を当てた。

この章では、雲南の知識人である呂志伊の翻訳活動を中心に、彼が明治日本の社会思想からどのように「思想資源」と「概念道具」を取り入れ、独自の歴史観を編み出したかを論じている。「国家」、「国民」と「民族」の概念について、呂は翻訳を通じて、中華世界に深く根付いていた「循環史観」を「一国史観」へと置き換えた。呂は同時に引用元である有賀長雄が日本の立憲主義と東洋の特殊性を論じた原文を無視し、日本語で書かれた西洋史の著作を断片的に抽出し、加工を加えた。呂は、西洋中心の文明史観の「普遍性」を追求するため、単線的な進歩史観を強調し、民族の独立と国家の成立の関係を読者に伝えようとした。

また、呂はブルンチュリや高田早苗などを引用しつつ、民族と国民の単位の一致を世界共通の基準として認識し、「一つの民族、一つの国家」という発想に従って国家論を構築した。しかし主権の所在について、呂はブルンチュリの考え方を採用せず、「主権在民」というルソー式の契約論によって国家を樹立する権力を国民に与えた。

このように、呂は社会進化論、単一民族国家思想、そして社会契約論を選び、諸思想の内部にある緊張と矛盾を保持しながら革命に向かって言論活動を続けていた。

こうした歴史意識と国家論を背景に、呂を含む『雲南』の編集者たちは雲南の歴史および非漢民族の位置付けに関する新たなナラティブを作り出した。この議論は第四章で深められ、雲南の歴史と民族に関する叙述の再編を検討した。特に、1907年に呂志伊と李根源が編集した『雲南』の特別増刊号『滇粹』に注目し、紙面分析を行なった。『滇粹』では、北方民族が中原に侵入して中華の旧来の秩序を乱したため、兵を挙げて元を殲滅した明は中華を代表する正統性を有する、と説いている。そして、明が雲南に出兵した理由は、雲南は中華から遠い地域に位置しているが、「旧来の領域」に属するため、「元虜」の支配下から「回復」しなければならない、ということにある。

大きな歴史の断絶が起こることを承知の上で、呂と李がこの文章を掲載した理由は、「夷狄に乱された中華を回復する」言説が現実的には満州族排斥という意味合いを含んでいるからだと思われる。清を「夷狄の朝廷」と見なし、雲南を含める「中華」を回復することはまさに革命派の影響を受けた『滇粹』の編集者の目標であった。そして、王朝と国家の分離に伴って再構築された雲南の歴史叙述においては、雲南の独自歴史も大漢族主義の発想によって抹消されることになった。

この章の分析を通じて、雲南に関する歴史叙述は清朝の定めた「公定的な歴史」から区別されると同時に、近代的な単線的歴史観を反映していることが明らかになった。また、『雲南』において、非漢民族の「土司」である刀安仁による投書と、土司を「同胞」と呼ぶ文章が同時に掲載されたことで、これまで排除されていた非漢民族が国民の原理に包摂されつつあることが示唆されている。「土司同胞」という表現は、「ネーション」の起源とみなされる遙かな過去から、国民国家の未来へと無限に延長される時間軸の中で、土司の存在を保証するものとなった。

雲南の地域特性に対する理解と近代思想の受容をした雲南人の誕生を背景に、雲南はいかにして歴史的主体性を取り戻したか。この問題については、地方自治と議会制度を核とする近代政治体制の確立、および暴力の生産と行使が雲南政府によって独占される軍事体制の整備という二つの側面から説明した。

第五章では、近代雲南における憲政運動、具体的にいえば地方自治と地方議会の成立を分析した。この章では、近代雲南の政治体制の樹立を、20世紀初頭の雲南憲政運動の起源、発展と継承を通じて、雲南人にとって「初めての民主体験」(La première

expérience démocratique) (Xiao-Planes 2007: 231-258)の獲得を問題関心と設定して検討した。

1906 年、清政府は立憲君主政への移行を決議し、予備立憲を宣言した。予備立憲は中央レベルに限らず、地方での官制改革も含む広範な制度改革を伴うものであった。中央では資政院が設置されたのに対して、各省では諮議局が設置され、議会開設の準備が進められた。一方で、省レベル以下の各級行政機関、すなわち県(州)、城、鎮、郷では地方自治制度が導入され、自治公所を選出することで地方公益事業を担わせた。それにより、形式上に最小の行政単位である村から中規模の省、さらに中央・国レベルまで、代議制思想に基づいて立憲国家への制度的転換が進められていった(侯 1993)。

雲南の場合も他省と同様な改革が展開された点で共通性を有しているが、一方で地域的な特徴を示している。清末期の雲南における地方自治は、清政府主導の動きであったため、自治よりも「官治」の色合いが濃かった。しかし、立憲国家の実現と地方の自治を関連させ、具体的には国民に選挙権を与える点では、近代政治の成立する基本的な概念がすでに地方自治の思想と実践によって種のように蒔かれたといえる。

また、地方自治総局と諮議局の機能には明確な区別が見られる。地方自治総局はあくまでも地方の公益事業を担うのに対して、諮議局は地方に関する議案を議決する政策形成機能を持ち、地方事務を管理・監督する権限を有する機構である。雲南諮議局の設立は、立憲体制が地方へ展開する中で制度や組織が整備されたことだけでなく、選挙による議員選出が雲南で初めて実現したという点で画期的な意義を持つ。

さらに、雲南特有の社会的・地域的特徴として、非漢民族の存在を忘れてはならない。雲南政府は土司に選挙権と被選挙権を付与し、省議会が正式に開催される際には、彼らを「特派員」として出席させた。このことは、雲南に住む非漢民族が政治的身分を獲得し、(準)国民としての権利が承認されたことを示している。

第六章では、20 世紀前半における雲南の「近代」の到達点が、辛亥革命ではなく、その後に起きた「第三革命」と呼ばれる護国戦争にあることを論じる。この戦争は、帝政復活を目指した袁世凱に対抗し、新生中華民国を守るための軍事行動として展開された。特に、同時期の日本やフランスの動向にも注目し、日露戦争後に急速に帝国化を進めていた明治日本が雲南の軍事思想や軍事体制に影響を与えたこと、さらにはフランス帝国も新生雲南政府に強い関心を示していたことにも着目した。

このような背景のもと、留日経験を持つ雲南の近代知識人たちは、辛亥革命を経て軍の主導権を掌握し、1915年には「護国」のスローガンを掲げて袁世凱の帝政復活に反対し、中央政府に対する戦争を起こした。1916年1月には、雲南都督府が全国に向けて「中華民國護国軍政府檄文」を發布し、これを受けて雲南政報社は『袁世凱偽造民意記実』という冊子を発行し、帝政復活をめぐり袁世凱が各省に送った17通の電文を公開した。

ここでは、袁政府に対する軍事行動の正当性は、雲南政府が人民の意志を代表し、近代政府と国民国家を裏切った袁世凱を打倒することに求められた。この行動を牽引した雲南は、中国西南に位置する単なる辺境の一省ではなく、国民の代弁者として国を守る正統性と軍事力を有し、むしろ中心に位置する袁世凱政府以上に共和制の価値を尊重し、それを守るために戦ったのである。

その結果、雲南は新生した中華民國を守る上で無視できない軍事勢力へと成長し、中華民國の再構築に寄与した。軍事活動を通じて、近代雲南は主体的な立場を確立し、中央政府との力関係において「周縁」から脱却するに至った。さらに、雲南は複数の「中心・周縁」関係の中で、中央政府や日本、フランスといった外部勢力と自主的に交渉し、多様で柔軟な関係を築いた。

その後、護国戦争に関する記念言説は、国内外の情勢の変化に伴い、再利用や再解釈を繰り返しながら変容していった。この過程において、雲南に関わるメディアは、辛亥革命前後の軍事思想の伝播、護国戦争期の世論形成、さらには現在に至るまでの記憶言説の生成において極めて重要な役割を果たしている。

結論と考察

上記の通り、中華世界の中心からにしても、近代世界の中心からにしても「周縁」に位置づけられ、さらに非漢民族が多く居住した地域として、近代雲南は「二重の周縁」と見られていた。しかし、近代に入ると、雲南人は明治日本を通じて近代思想を吸収し、西欧式の国民国家をモデルとして、地域内部の文化統合と政治統合を進めることで、国民国家建設への道を歩み始めた。

明治期の日本で育成された雲南初の近代的知識人層は、メディアを通じて近代知を雲南社会へ伝え、地域の「近代化」を促進する重要な役割を果たした。一方で、フランスは自身の帝國的な姿を示し、雲南の人々の自己意識形成に影響を与えた。その結

果、かつて中華世界で周縁化されつつあった雲南は、近代世界における周縁性を自覚し、さらにその脱却を目指して一定の成果を収めた。

本研究では、六章にわたる考察を通じて、世紀転換期における雲南の「近代」をこれまでの研究とは異なる視点から検討した。従来の研究と比較すると、本研究では明治日本とフランスが近代雲南に及ぼした影響を、多言語資料を用いて明らかにした点特徴的である。これにより、近代雲南を東洋と西洋の交差点として捉え、雲南が「西南」という枠を超え、東アジア的な性格を有していることを再発見した。

このように、複数の価値体系が交差する「周縁」に注目した本研究のアプローチは、今後の周縁研究に新たな視座を提供できると考えられる。特に、ローカルとグローバルな力関係を複合的に分析する視点は、周縁の多様な可能性を解明する上で有用である。

参考文献

- 石島紀之 (2004)『雲南と近代中国：「周辺」の視点から』青木書店
- 村田雄二郎 (1999)「毛里和子著『周縁からの中国：民族問題と国家』」『国際政治』121,pp.201-204.
- 白永瑞著, 中島隆博解説(2016)『共生への道と核心現場：実践課題としての東アジア』法政大学出版局
- 毛里和子 (1998)『周縁からの中国：民族問題と国家』東京大学出版会
- 侯宜傑(1993)『二十世紀初中国政治改革風潮：清末立憲運動史』中国人民大学出版社
- 李頌平(1966)『客郵外史』保安郵票社
- 張軻風(2012)「異様の目光:明清小説中の雲南鏡像」『明清小説研究』(4),pp.17-28.
- ピエール=エチエンヌ・ヴィル著, 美知子・マセ訳 (1996)「近代中国と中国学」『思想』865,pp.91-115.(Pierre-Étienne Will. (1994). *Chine Moderne et Sinologie. Annales Année*(49)1, pp.7-26.)
- Xiao-Planes, Xiao-Hong. (2007) .La première expérience démocratique en Chine(1908-1914) : tradition chinoise et pratiques des élites locales, en M. Delmas-Marty et P.-E. Will (éd.), *La Chine et la démocratie*, Fayard